

手づくりハザードマップ作成手引き(参加者編) 1日目



■手づくりハザードマップの作成の目的

手づくりハザードマップは、地域のみなさまが、お住まいの地域の水害の危険性について“気づき”正しく“理解”し、いざというときに的確な“判断”ができるように取り組む過程によって、個々の力となるとともに、地域コミュニティの活性化を図るものです。

2日間(半日を2回)集まって、勉強会・まち歩き・マップづくりを行います。



清須市洪水ハザードブック

“洪水ハザードマップ”から、地域で想定される最大被害などを勉強します(外水)
洪水ハザードマップには、万が一お住まいの地域の近傍を流れる河川がはん濫した際に、予測される最大の浸水深が記載されています。

その他にも、お住まいの地域で指定されている避難所の場所や連絡先、避難情報の発令基準、いざといったときの持ち物など、水害のときに役立つ様々な情報が記載されています。

洪水ハザードマップを、ご家族を水害から守るために必ずご覧ください。

そうってからでは遅い！ 早めの避難！

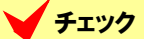


平成12年東海豪雨 一宮市での内水はん濫の様子

“手づくりハザードマップ”では、洪水ハザードマップの状態に至るまでの予兆や過程(内水)と、行動のためのヒントをまとめます

洪水ハザードマップからは、地域の危険を知ることができますが、最大の被害を表現しているため、この段階では、行動に移すには手遅れです。

手づくりハザードマップでは、「**内水(河川に入りきらない水で浸水すること)**」が始まり、**更に強い雨が降っている状態**を思い描きながら、お住まいの地域で**早期の判断と行動を行う際のヒントとなる地図を作成しましょう。**



■手づくりハザードマップの例(安城市藤野地区)



■手づくりハザードマップの作成の進め方

1日目スタート

A 勉強会
(全員で・60分)

(1) お住まいの市町村が発行する「洪水ハザードマップ」には、何が書いてあるの?

お住まいの地域の近傍を流れる河川がはん濫した際の、予測される最大の水深や地域の避難所などが分かります。

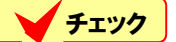
(2) そんな大きな水害には、どんな危険が潜んでいるの?(過去の被害などから勉強しましょう)

そうってからでは遅い! そうなる前に、早めに判断! 早めの行動!

B まち歩き
(グループで・60分)

(3) 手づくりハザードマップを作ろう!

1) お住まいの地域を歩いてみよう



大きな水害の数時間前の、「内水」が始まって更に強い雨が降り続けている状況を思い描きながら、お住まいの地域で**早期の判断と行動を行う際のヒントとなる地図を、みずから作成します。**

「もしお住まいの前の道路が、足首まで水に浸かっているとしたら?」
「更に大きな水害になるような強い雨が降り続けているとしたら?」

そうした浸水している様子を思い描きながら、住み慣れた地域を改めて歩いてみると普段見えないものが見えてきます。

2) まち歩きでの確認・発見を、白地図に書き込んでみよう

“地域で最初に浸水する場所やその浸水の広がる方向”
“浸水したときに見えなくなるフタのない側溝など危険な場所”
“まだ浸水が少ないときに比較的 safely に歩ける避難路”
“いざといったときに避難できる避難所、たどり着けないときの一時避難所”

などなど、まち歩きで確認した・発見したこと、普段から気になっていること、昔からの言い伝えなど、どんどん書き込んでいきましょう。

3) 作業結果を発表しましょう

地図に書き込まれた内容をグループごとに発表し、全員で共有しましょう。

1日目終了

お疲れ様でした。1日目の作業は終了です。

“まち歩き”と“ワークショップ”の進め方とポイントが次ページに記載されていますので、参考にしてください。
地図を確かなものにするために、後日、2時間の作業があります。こちらにもぜひご参加ください。

雨が強く降り、地域で浸水(内水)が始まっています！
 付近の河川もどんどん増水しています！
 さらに雨が降り続き、雷が鳴っている。そんな状況をイメージして歩きましょう。

○避難所の位置を確認しながら歩きましょう

避難所の位置を確認し、避難所までの経路をイメージしながら歩きましょう。
 浸水により、避難所までたどり着けないことも考えられますので、ある程度の広さがあり、比較的高台で、高い建物がある場所を一時避難所とすると良いでしょう。建物の管理者との話し合いなどが必要となりますが、まずは避難所の位置をイメージしながら歩きましょう。

○よく浸水する場所について、考えましょう

まちを歩きながら、経験した水害を思い出したり、話し合ったりしましょう。
 特に、くぼ地や、水が集まる場所、最初に浸水する場所など、経験した水害を話しあい、メモしましょう。

チェック箇所



※まち歩きの最中は、発見した上記のような箇所を白地図にメモし、特に重要と思われるものについては写真を撮ってきましょう。

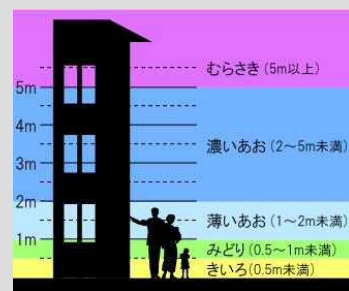
【まち歩きのQ&A】

Q:一時避難所は何を基準に設定したら良いですか？

A:「洪水ハザードマップ」で示される浸水よりも高く、公共性がある程度の収容力がある、建物や高台などにしましょう。

洪水ハザードマップは、想定される最大の浸水深を表示していますので、それよりも高く、ある程度の収容力がある建物が良いでしょう。

公共施設が良いですが、周囲にない場合は、中高層マンションや工場などが考えられます。建物の所有者や、マンションであれば住民とも話し合い、災害に備えて事前に利用のルール作りをすると良いでしょう。



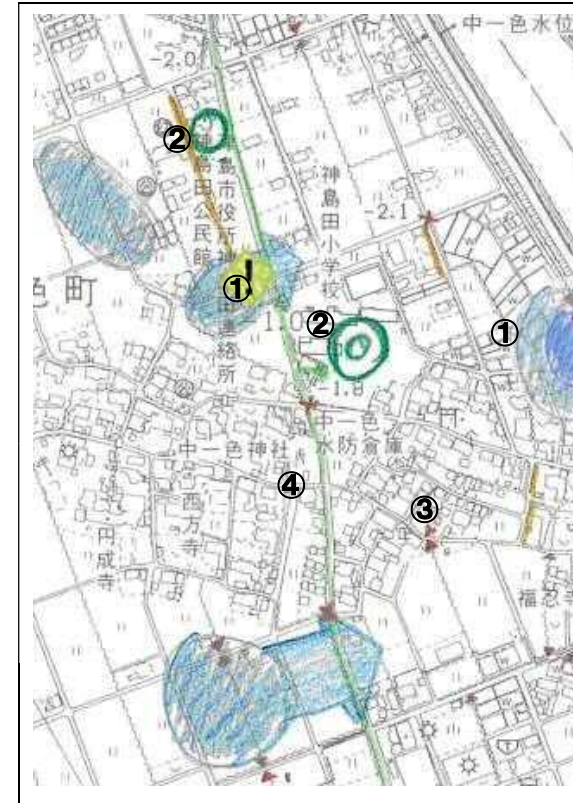
まち歩きで確認・発見したこと、普段から気になっていること、昔からの言い伝えなど、どんどん手書きで書き込んでいきましょう

①役割分担 (5分)

・話し合いを白地図にまとめる「書記」と、発表会の「発表者」を決めます。

②まち歩きの結果まとめ (30分)

・まち歩きで発見したことを、白地図にまとめます。



1. 水に浸かりやすい場所を水色で塗りましょう

過去の水害の経験や、地形などをもとに、早く浸水する箇所を、水色で塗り、その浸水が広がる方向を → (矢印) で描きましょう。流れ込む水は → (濃い青色の矢印) で描きます。
 ※地域で最も早く浸水する箇所を、! で描きます。
 ※窪地で水が集まりやすく、天井まで浸水する恐れがある箇所があれば濃い青色(または紫)で塗ります。

2. 避難所を、●(緑の2重丸)で描きましょう

ある程度の高台で人数が集まれる空間がある高い建物を探し、一時避難ができそうな場所があれば、○(緑の1重丸)を描きます。

3. まち歩きで把握した浸水時に危険となる箇所を赤と橙色で記入します

凸部分(道路上の突起物)	× — (赤)
凹部分(側溝、水路やマンホール)	× — (橙)
水が流れている箇所	▲ (赤)

必ずしも全ての側溝やマンホール、河川堤防が危険と限りません。そうした中でも、避難途上で注意を促す必要のあるものについて記入してください。

4. 避難経路を → (緑)で描きましょう

避難の問題点を話し合い、安全な避難経路を描きましょう。
 浸水が深くなる前の避難経路は → (緑・実線)
 浸水が深くなった、または河川はん濫の後は → (緑・点線)

※凡例にない印を作った場合は、清書係の作業をやすくするために、必ず印の意味を書いておきましょう。

③地域でできる水害対策の話し合い (15分)

緊急連絡網の構築 (取り残される人がないように、連絡網の構築について話し合います)
 自主避難の呼びかけの必要性やあり方 (外から情報が届かなくても地域で安全が確保できます)
 一時避難所の所有者とのルールづくり (地域全域が浸水するような地域では特に有効です)
 要援護者の支援 (名簿は必要か? いつだれが支援を行うのか? など)

④発表会 (10分)

・各グループで記入した白地図をもとに、発表会を行います。
 ・発表にあたっては、できるだけ「過去の水害の経験」や「その浸水の状況」などを交えて発表するように心がけましょう。

【ワークショップのQ&A】

Q:濃い青色(または紫)で塗る「窪地」というのは、どのような場所ですか？

A:ゲリラ豪雨で水が溜まりやすく、命の危険性がある場所です。

近年多発している「ゲリラ豪雨(予測できない短時間の集中豪雨)」が発生した場合、河川の水位上昇の前に、急激に「内水はん濫」が進展する可能性があり、水が溜まりやすいところでは大変危険になります。

過去の豪雨で、「内水はん濫」により被害があった場所を中心に、堤防が決壊しなくても2m以上浸水する可能性があるか、想像してみましょう。

また、ゲリラ豪雨時はあまり情報が届きませんので、地域で声をかけ合う習慣づくりが重要になります。

